

第1回「初めての『おはよう』～コミュニケーションの扉が開いた瞬間～」

朝の陽光が施設の窓から差し込む中、いつものように利用者の皆さんをお迎えする準備をしていたある日のことです。その日も、太郎さん（仮名・30代男性）は無言で施設に入ってきました。太郎さんは当施設を利用し始めて3年になりますが、これまで職員や他の利用者さんとの言葉でのやりとりはほとんどありませんでした。

太郎さんは軽度の知的障害があり、言葉を理解する力はあるものの、自分から話しかけることがとても苦手でした。職員が「おはようございます」と声をかけても、小さくうなずくか、時には目を合わせることもなく通り過ぎてしまうことがほとんど。ご家族からも「家でもほとんど話さないんです」と相談を受けていました。

私たち職員は、太郎さんとのコミュニケーションを諦めることなく、毎日根気強く声をかけ続けました。「おはようございます、太郎さん」「今日も良い天気ですね」「昨日はお疲れさまでした」。返事がなくても、太郎さんが心地よく過ごせるよう、優しく話しかけることを心がけていました。

担当の田中職員は、太郎さんが音楽を好んでいることに気づき、朝の時間に一緒に好きな歌を聞いたり、リズムに合わせて体を動かしたりする活動を取り入れました。言葉でのコミュニケーションが難しくても、音楽を通じて心を通わせることができるのではないかと考えたのです。

少しずつ変化が現れ始めました。太郎さんは職員の日を見る時間が長くなり、時折小さく微笑むようになりました。活動中に職員の手を軽く叩いてリズムを取ったり、身振り手振りで意思を伝えようとする場面も増えてきました。

そして、忘れもしないあの朝がやってきました。いつものように施設の入りで太郎さんをお迎えしていると、太郎さんがゆっくりと私の方を向き、小さな声でしたが、はっきりと「おはよう」と言ってくれたのです。

その瞬間、施設内にいた職員みんなが振り返りました。太郎さん自身も少し驚いたような表情を見せましたが、すぐに恥ずかしそうに微笑みました。私たちは感動で胸がいっぱいになり、「おはようございます、太郎さん！今日もよろしくお願いします」と心を込めて返しました。

それ以来、太郎さんは毎朝「おはよう」と挨拶してくれるようになりました。最初は小さな声でしたが、日を重ねるごとに明るく元気な声になっていきました。他の利用者さんや初めて会う職員にも、自分から挨拶できるようになりました。

ご家族にこのことをお伝えすると、お母様は涙を流して喜んでくださいました。「家でも『おはよう』って言うようになるようになったんです。本当にありがとうございます」と何度もお礼を言ってくださいました。

太郎さんの「おはよう」は、私たちに大切なことを教えてくれました。コミュニケーションは言葉だけではないこと、そして根気強く関わり続けることの大切さです。一人ひとりのペースを大切にしながら、その人らしい表現方法を見つけていくことが、私たちの役割なのだと改めて感じました。

今日も太郎さんは元気に「おはよう」と挨拶してくれます。その笑顔は、私たちにとって何よりの宝物です。